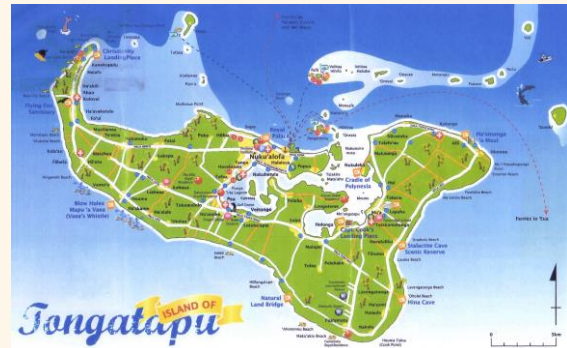


人の縁、組織の縁、そして南太平洋でのある挑戦

NPO「社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会」理事長 有岡 正樹

昨年 12 月 9 日(火)に南太平洋島嶼国の一つである「トンガ王国」(以下トンガ)で、CNCP 会員である「道普請人」(木村亮理事長)と「社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会(「スリム Japan」)」(有岡正樹理事長)という 2 つの NPO 法人が共催して、ワークショップを開催した。オーストラリア等が東南アジア政府や関連する様々なステークホルダーに対し近年力を入れてきている、“Capacity Building” と称する施策がある。



現地行政やコミュニティ組織などを対象に、事業化手法や事業例、リスクマネジメント、合意形成の在り方等を指導し、ときには協働研究といった形で長期的に支援していこうと云うものである。

この話のきっかけは、CNCP の前身である「土木学会 NPO 中間支援組織協議会」(平成 24 年 8 月～26 年 3 月)に遡る。その協議会が土木系 NPO 法人においても、他の NPO 分野と同様中間支援組織が必要との議論を展開していた際、実際に試行事業をいくつか立ち上げ他の NPO 法人との連携の在り方を検討しようということになった。その試行事業提案の一つが「スリム Japan」であった。

3.11 東日本大震災復興に関連して提案していたがれき処理の方法について、「Green Hill 構想を適用した Capacity Building 施策展開」と題して登録し、それを機に協議会の会員に協働を働きかけていたところ、上記「道普請人」及び NPO 法人「リサイクル技術振興会」(下村嘉兵衛理事長)から、“何か一緒できることがあれば”との賛意があった。もちろん国際事業であり、交通費等実費だけでもかなりの出費となる。それぞれが「自助」事業として役割分担して対応するのは極めて厳しいという共通認識から、「スリム Japan」がその実務的な活動の経緯の中で得た課題に対し意見やアドバイスをいただくことになった。時に触れ具体的な多くの示唆を得たし、そうした機会に話してもらった「道普請人」そのものの活動状況(土木学会 100 周年記念出版図書「インフラ・まちづくりとシビル NPO」第 3 章 6 節に詳しい)から多くを学んだ。26 年 7 月には「スリム Japan」の「放談会」で講演もしてもらっている。

以上のような背景のもと、「スリム Japan」としては 26 年 12 月トンガでのワークショップ開催を目標に具体化に向けて動き出していたが、「道普請人」の理事長ではなく京都大学教授として、「スリム Japan」が独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業(平成 25 度～平成 27 年度)の一端に関われば、研究活動として旅費や滞在費を支援することができる、との打診があったのである。その事業の研究課題名は「アジア・太平洋州国でのコミュニティ組織力を活かした農道整備・防災工に関する研究」(研究代表者: 京都大学大学院工学研究科教授 木村亮)である。このうち農道整備だけを採用すれば「道普請人」の‘土のうによる道直し’であり、防災工を採用すれば「スリム Japan」の‘廃棄物を利用した高波災害防・減災 Green Hill’という事例研究となりうるという背景があった。

さて、そんな次第でのワークショップだが、我々が12月初旬日本を立つ直前になって、当初予定の12月8日(月)が祭日なので開催を一日延期して欲しいとの訳の分からないメールが入り、結局変更詳細も決まらないまま6日夕方トンガ入りすることになる。現地に着いてから分かったのだが、もともとは12月4日が国王の誕生日で祭日であったが、3連休制を取り入れるためについ最近法改正があり、通知が十分行きわたっていないといった、信じられないような話であった。そして8日朝には国王生誕式典が行われていた。



そんな次第で急きょ日程変更となった翌9日、それでもいくつかの省庁からPalaki土地・自然資源長官(CEO)を始め12,3人の幹部が参加してくれ、午前中は木村理事長による「土のうを利用しての道直し」について、そしてその後ランチオンミーティングのような形で有岡が「廃棄物を利用してのGreen Hill構想」と題して、それぞれ1時間ずつ話題提供をした。

翌日ワークショップを主催してくれたPalaki長官と再会し、“自らが使う道路はその地域の住民が自ら直し、自らが生活する際に出てくる廃棄物を使って、例え年間100mでも防潮堤を自らが造る”ことの大切さを念押ししてトンガを後にし、フィジーに向った。木村理事長は9日すでに帰国されていたので、有岡がシドニー在住トンガ人Mahe氏共々フィジー政府や国立大学、さらにはJICAフィジー事務所を回り、ワークショップでの説明を繰り返した。山道を入っての小さな村落の道路状況も見てみた(写真)。フィジーでの最初の一步というところであろうか。

この記を書いている今日12月26日はインドネシアアチェ地震から10年、避難訓練がなされたが参加者が全住民のわずか1%に過ぎず、日本のODAで建設された津波避難施設を兼ねた地域コミュニティビルの窓などが割れ早くも風化が……、また、避難経路を示す表示板が倒れたりして維持管理されない、との報道であった。トンガでも写真のような同様の表示が、まだ真新しかった。

NPO法人活動に関わって早6年、関係する組織やそれに関わる人間の「連携」だとか「協働」といったNPO法人活動に特有な言葉がどうしても独り歩きしてしまう。ただ、もう少し俗な、分かりやすい表現でいうとすれば、必要なのは、傷をなめ合ったりすることのない強かな「人の縁、組織の縁」だと思うのである。今回、海外でのNPO活動の先駆者としての木村理事長から3食を共にしながら得たアドバイスは、私自身のこれからのCNCPへの関わり方に関して、教えられるところ大であった。

